

## 平成27年度第1回紀南地域高等学校活性化推進協議会議事録

日 時 平成27年7月10日（金）18：15～21：15  
場 所 熊野市文化交流センター多目的ルーム  
出席委員 大森 達也、中田 貴也、大井 隆、田尾 友児、倉本 勝也、  
生駒 亮哉、西 章、莊司 祐介、寺本 幸治、檜山 祐一、  
久保 治也、廣畑 勝也、徳田 佳郎、甫本 紀人、山本 健司、  
寺本 育史、谷合 徹、堀川 恭太、新谷 武文  
欠席委員 榎本 健治 （以上敬称略）  
（事務局） 教育政策課長 宮路 正弘、教育政策班長 辻 成尚、  
教育政策課 上村 和弘、宇陀 和彦、西 達夫

### （事務局）

皆様方におかれましては、ご多用の中、ご出席いただきありがとうございます。ただ今から、平成27年度第1回紀南地域高等学校活性化推進協議会を始めます。

まず、お手元の配付物を確認させていただきます。事項書が表紙の2カ所留めの配付資料と座席表です。不足等ございませんでしょうか。

なお、開催案内の文書でもお知らせしましたが、本協議会は公開で行います。また、ご発言等はすべてマイクを通していただきますようご協力をお願いします。

それでは、事項書に沿って進めさせていただきます。開催にあたり、三重県教育委員会事務局教育政策課長の宮路正弘からご挨拶申し上げます。

### 1 あいさつ

#### （事務局：宮路課長）

本日は、平成27年度第1回紀南地域高等学校活性化推進協議会にご出席いただきましてありがとうございます。

県教育委員会では、少子化等の進む地域において協議会を設置し、高等学校の特色化・魅力化や適正規模・適正配置について協議を行っていただいています。

当地域におきましては、平成24年度に一定の方向性をまとめていただきました。それを踏まえて、平成25年度、26年度と協議を続けてきていただいていたところ

です。  
平成27年度につきましては、本日が1回目となりますが、引き続き、木本高校・紀南高校の活性化に加え、少子化が進む中で将来的に新しい学校を設置する場合の学校像等について協議いただくこととしています。後ほど、今年度の中学卒業者の進路の状況等について、最新の資料を提示させていただき、情報を共有しながら協議いただこうと思っております。子どもたちにとってよりよい教育環境の実現につながるよう活発な議論をお願いします。

さて、冒頭で申し訳ないのですが、1点お詫びがございます。

昨年度の最後の協議会で2つの意見照会をさせていただきました。1つ目が昨年度から協議いただいていた新しい学校像のたたき台についての意見、2つ目が新たな学

校を設置する場合の設置場所の検討に係る候補地についての意見をお願い申し上げたところです。新しく委員になられた方にもお願いをしまして、このお忙しい時期に意見等を出していただいたところですが、2つ目の候補地の議論について、いろいろなところから指摘がありました。私有地を含む場所について、所有者に何の断りもなく公の場で個別の具体的な議論をしていくことが本当に適切であるかどうか。それから、場合によっては利権や利害に絡む可能性あることをオープンに議論していくのはどうかという指摘がありました。また、そういう面で、ここにご参集の委員の方々のいろいろな発言に対する責任問題も危惧されますので、大変申し訳ないのですが、場所の議論については、事前の意見集約を踏まえた事務局からの大まかな紹介にとどめさせていただき、本日は協議を控えさせていただきたいと思っております。

今後、事務局のほうでどのような形の議論ならば可能か検討させていただき、次回以降に改めて提案させていただきたいと考えています。大変短い期間でご無理をお願いしたにもかかわらず、こういうことになったのは申し訳ありませんが、我々も配慮が足らなかったと反省しています。オープンなところでそういう協議をすることが本当にいいのかどうか、どのような協議方法ならば可能かということについて検討させていただきたいと思っておりますので、本日は、場所の議論はお控えをいただきたいということで、冒頭にお詫びを申し上げます。

その分、両校の活性化と将来的な学校像について、ぜひ活発な議論をお願いしたいと思っております。このようなお詫びから始まって申し訳ないのですが、本日もよろしくお願い致します。

## 2 自己紹介

### (事務局)

次に、配付資料の2ページをご覧ください。

本協議会の委員名簿を掲載しています。今年度は地域有識者を1人増員し、全員で20人の構成とさせていただきました。3市町の商工団体にご推薦いただいた方々にそれぞれ市町の産業界の代表として委員をお願いさせていただきました。

なお、榎本委員はご都合により本日欠席とのご連絡をいただいております。莊司委員は、お仕事の関係で遅れるとのご連絡をいただいております。中田委員は間もなくご到着いただけるものと思っております。

それでは、ここで名簿をご覧くださいながら、委員の皆様から自己紹介をお願いします。恐れ入りますが、新谷委員から時計回りで、座席順にお願いします。なお、時間の関係もございますので、所属とお名前のみでお願いします。

【新谷委員から座席順に自己紹介】

## 3 会長及び副会長の選出

### (事務局)

次に、配付資料の1ページをご覧ください。開催案内とともにお送りしました当協議会の設置要項を掲載しています。この設置要項の第3条第2項及び第3項に基づき、

会長及び副会長の選出に移ります。

選出にあたり、ご意見はございませんでしょうか。

特にご意見がないようでしたら、事務局から提案させていただきますが、よろしいでしょうか。

(委員が了承する。)

それでは、会長を中京大学の大森委員、副会長を紀南PTA連合会長の莊司委員にお願いしたいと思います。なお、莊司委員は遅れられるということですが、事務局から副会長として提案させていただく旨、ご了解いただいています。

以上の提案でお願いさせていただいてよろしいでしょうか。

(「異議なし。」という声あり。)

ご承認いただきましたので、大森委員は会長席にご移動をお願いします。

それでは、会長にご挨拶をいただき、以降の協議の進行をお願いします。

### **(大森会長)**

改めまして中京大学の大森です。今年度もよろしく申し上げます。

4年目になりましたが、私自身も1年目は三重中京大学の教員として、ここの会長をさせていただきまして、2年目以降は中京大学の教員として会長を務めさせていただきました。今年度4月からは中京大学の学長補佐として学長を補佐する立場になりました。

皆様ご存じのように、教育界は、今、大学、高校、中学校、小学校、どこでも非常に大きな改革の嵐が吹き荒れています。大学も昨今は、国立大学の改革について新聞を賑わせていますし、私立大学も地方の大学と都市圏の大学の定員の問題は、内閣府の問題になるような課題です。嵐の真ただ中に入っていると感じています。特にこの1～2年、昨年よりも今年4月に入ってから文部科学省の改革の嵐というのは、非常に厳しいものを感じています。

この協議会ですが、協議会という名は付いていますが決定権はございません。県教育委員会に対して意見を述べるという場でもあります。この協議会は、平成24年度に再開しましたが、今後の協議のベースとなるものは、資料3ページに書いてありますように、平成24年度の協議のまとめです。そして、平成25年度からは小学校の教員代表、小学校PTA代表の方に、平成26年度からは小学校の校長代表の方にもお入りいただき、この地域全体の子どもたちのことを考えていく場所として、この協議会を継続しています。

平成25年度は、紀南・木本両校それぞれの特色化・魅力化を図るための取組を紹介しながら、この紀南地域の高校を中心とした教育の活性化をどうすべきかを協議してきました。

そして、昨年度、平成26年度は、それまでの協議を踏まえて、平成31年度以降を見据えた具体的な議論を始める必要性が共通理解されたと考えています。

ただ、今年度から新しく委員になられた方もみえますので、資料1に基づき、改めて平成24年度以降の協議を確認したうえで、本日の協議事項に入りたいと思っています。

本日の協議事項としては大きく3つございます。1つ目は、今年度の協議会の進め方について協議させていただきたいと思います。2つ目は、昨年に引き続きまして、木本・紀南両校の活性化について意見交換させていただきます。3つ目は、昨年度、平成31年度以降を見据えた議論を始めなければいけないということで、昨年の終わりに皆様に意見照会させていただきましたので、それを踏まえて平成31年度以降の学校像について意見交換させていただきます。

先ほど宮路課長からお話がありましたように、私も昨年度、会長として皆様に新たな学校を設置する場合の設置場所の検討に関して、意見集約等をお願いしました。ただ、協議会全体、あるいは各委員個人が責任を負いきれない問題が発生するという懸念が生まれてきましたので、今回に関しては、場所についての協議は控えさせていただきたいと思います。本日の3つ目の協議事項につきましては、学校像について検討するというようお願いしたいと思います。昨年度、2点、無理なお願いしたにもかかわらず、一方だけが今回の協議事項から外れご迷惑をおかけしました。そして、配慮が不足したことをお詫び申し上げます。

それでは、本日も21時を目途に協議を進めたいと思いますので、進行にご協力をお願いします。

事項書4の確認・報告事項に入ります。まず、「(1)平成24年度以降の紀南地域高等学校活性化推進協議会における協議等について」、事務局から説明願います。

#### 4 確認・報告事項

##### (1) 平成24年度以降の紀南地域高等学校活性化推進協議会における協議等について 【資料1】

##### (事務局：辻班長)

確認・報告事項の(1)番です。先ほどの会長のご挨拶の中でも概要について触れていただきましたが、本年度からの委員もいらっしゃいますので、改めてこの資料1に基づき説明したいと思います。

この地域の協議会は、平成16年度から行っており、平成18年度に一度まとめが出されています。そして、平成24年度から再開しています。資料1は、それ以降のことをまとめています。

「平成24年度の協議のまとめ」とありますが、中学校卒業生数の減少予測を踏まえたこの地域の県立高校の中長期的なあり方について、平成24年度に協議して次のまとめがされました。紀南高校は、1学年2～3学級、木本高校は1学年5～6学級の規模の単独校としてそれぞれが存続することが望ましいが、将来的に地域状況を考慮して紀南高校は1学年2学級、もしくは、木本高校が1学年5学級の維持ができないとき、両校の統合は避けられない。また、附帯事項として、将来的に学校を統合する場合には、新高校の設置は既存の教育財産の活用が原則であるけれども、防災面等に配慮して両校の現在地以外の新しい場所に設置することも検討する必要があるとしました。これが平成24年度のまとめです。

このまとめに基づいて、平成24年度末に「県立高校活性化計画」を策定しています。そこでの紀南地域についての記述は、表現は若干変えてある部分もありますが、

今申し上げたまとめに基づいた記述とさせていただきます。

これらに基づき平成25年度以降、協議を進めてきました。協議の柱としては、平成25年度の協議の概要のところにあるように、1つは両校の活性化の取組について、もう1つはこの地域の高校の中長期的なあり方について、この2つでした。

まず、両校の活性化の取組については、木本・紀南両校において、それぞれサポート委員会や学校運営協議会で各校の活性化について特に話し合っていました。この協議会では、管外への進学希望者が減ったことから両高校の活性化に成果が見られたのではないかとまとめられました。

そして、中長期的なあり方については、主な意見をいくつか読み上げていきます。木本、紀南両高校の活性化の問題と、統合するのならどのような高校としていくのかという問題を両輪として協議を進めるべきである。3ページ一番下のところ、統合するならばどのような高校かという議論も始めるべきである。小学校を卒業する時点で県外の私立中学校、高校へ進学するのか、地元公立中学校から公立高校へ進学するのか選択することになる。ちょうどこの頃、この地域から小学校卒業段階で隣の和歌山県の中学校に進学する人数が増えているのではないかという議論があったことから、小学校を卒業する時点で県外の私立中学校、高校に進学するのか、それとも、地元の公立中学校に進学するのかを選択することになるため、中学校の卒業者が大きく減少すると予測される平成31年度に高校に入学する子どもたちが、小学校を卒業する平成27年度までには新たな高校のビジョンを示すことが必要ではないかという協議もされました。

続いて、平成26年度のところに進みます。平成26年度の協議ですが、(1)木本・紀南両高校の活性化の取組のところ、主な意見をいくつか読み上げます。就職や進学への対応、部活動への取組等、両方とも非常に頑張っており取り組んでいるというご意見。部活動における中学校と高校の連携によって、生徒の高校進学への意識が高まったというご意見をいただきました。

(2)生徒の進路実現につながる「学力向上」を中心とした小・中・高連携の推進についての協議もしました。その中で、授業研究を中心とした小・中・高の連携を広げていき、地域の子どもの12年間のスパンで育てていく取組が必要であるというご意見。小・中・高連携の一環としての授業交流の取組は有用であるし、もっと広がってほしいというご意見をいただきました。

(3)将来的に新たな学校を設置する場合の学校像等について、後ほど、資料12のところの説明しますが、主な意見としては、就職から進学に至るまで、生徒一人ひとりの多様なニーズに応じたコース等が設置される学校づくりを進めてほしいというご意見。自転車や公共交通機関で通学可能な学校である必要があるというご意見。現在の2校を単純に引き継ぐだけでなく、国の教育改革の動向も踏まえて、新たな発想で学校づくりを考える必要があるというご意見。地域の学校として、学校・家庭・地域が共に子どもを育てていこうという雰囲気を持った学校というご意見。保護者の立場で考えると、2校を存続させたいという思いを乗り越えて、新たな学校の構想づくりを進めていかなければならないというご意見をいただきました。

後の協議事項でもありますが、今年度の進め方も同じ方向性で協議していこうとい

うことになりました。

25ページの資料の12をご覧ください。先ほど確認したようなご意見を踏まえて、昨年度出させていただいた資料を修正したものが、本日の資料12です。昨年度の第4回協議会終了後に修正を入れたものです。将来的に新たな学校を設置する場合の学校像です。

まず、「1 学校のコンセプト」としては、

- 家庭・地域から信頼され、家庭・地域と共に生徒を育てていく学校
- 自らの進路目標を持ち、その実現に向けて努力する生徒を育む学校
- 紀南地域への愛情や規範意識、社会性を育む学校
- 活発な学校行事・部活動により紀南地域を活気づける学校
- 安全・安心な環境の学校

です。

次に、「2 学校のイメージ」としては、その下に図示しましたが、まずは左側の「上級学校への進学を目指す」部分が必要であろうということで、一つは進学希望に対応する普通科です。もう一つの方は、何学科かは明確になっていませんが、「自らの進路を探究し、実現を目指す」ということで、就職などを考えたデュアルシステムや職業教育の充実、地域の資源を活用した学びを展開するコースが設置できる学科がよいのではないかとということです。

そうすると、結構多様な授業が必要になりますので、真ん中に「単位制」とあります。自らの興味・関心や進路希望に沿って学びができる単位制の仕組みを導入するのがよいのではないかとということです。そして、グローバル教育やキャリア教育の充実が必要であろうということです。さらに、規範意識や社会性、活発な部活動、安全・安心な環境、地域との協働というのが学校の土台にあります。

また、今も木本高校にあります。定時制という学びの場も必要ではないかとということで、「さまざまな入学動機や学習歴を持つ生徒が学ぶ」定時制も学校像に入っています。

最後に、「3 学校の特色」としては、上の図にもありますが、今、紀南高校が取り組んでいるコミュニティ・スクールの導入、学習と部活動の両立。就職から進学にいたるまで幅広い進路希望・学習ニーズに対応した学校、紀南地域の小中学校と連携した取組の充実した学校。このようなところまで昨年度はご協議いただき、まとめさせていただきました。

### **(大森会長)**

ただ今の事務局からの説明に対して、何かお聞きになりたいこと、あるいは、付け加えていただくことがありましたらお願いします。よろしいでしょうか。

それでは、皆様のご意見を伺う前に、莊司副会長が到着されましたので、簡単に自己紹介をお願いしますか。

### **【莊司副会長の自己紹介】**

協議に戻ります。先ほどの説明にもありましたように、この協議会は平成24年度から再開され、3ページの1にある平成24年度の協議のまとめがベースになってい

ます。それを踏まえて、4ページの平成26年度のところに協議の概要が書いてありますように、平成31年度以降のことについても、昨年度から考え出したという現状です。

何かここでご質問、ご意見等はございませんか。

引き続きまして、「(2) 紀南地域の高等学校を取り巻く状況等について」、事務局から説明願います。

## (2) 紀南地域の高等学校を取り巻く状況等について【資料2～8】

### (事務局：辻班長)

この紀南地域の高等学校を取り巻く状況について、最新のデータ的な資料の説明をさせていただきます。

それでは、5ページの資料2をご覧ください。これは「中学校卒業生数の推移と予測」で、これまでの推移と今後の予測を示したデータです。東紀州地域と書いてありますが、ここは紀南地域の協議会ですので、この資料では真ん中あたりの熊野市と南牟婁郡の2つを合わせて「紀南地域」と呼んでいます。その部分を中心に説明していきます。

熊野市と南牟婁郡を足した網掛けになっている小計部分の左から4つ目、平成27年3月卒業のところをご覧ください。今、高校1年生になった学年のところですが、この平成27年3月には、この地域で340人が中学校を卒業しました。その下の「-41」というのは、前の年に比べて41人少なかったということです。

今の中学3年生は、平成28年3月卒業となりますが、予測されているのは352人で、今の高校1年生よりも12人増える予測です。その欄を右方向に見てきますと、今の中学2年生のところでは、前の年に比べて15人減る予測です。その後減少が続きますが、今の中学1年生のところでは「-3」、平成31年3月と平成32年3月のところでの減少が大きく「-43」と「-39」、それぞれの年で43人、39人が減っていくと予測されています。

一番下の欄は平成27年3月との対比です。今の高校1年生と比べると、平成32年3月には88人少なくなります。平成33年3月は27人増えて279人になります。その後は、「-7」、「-1」と小規模ですが、減少傾向が続いていくという予測になります。

その下の《参考》のところは、木本高校と紀南高校の募集定員をどれだけ満たしていないかという欠員の状況になります。

平成25年3月のところを見ていただくと、木本高校の定員が200人、紀南高校の定員が120人で、今と同じ定員になっていますが、欠員は11人と3人を合わせた14人でした。その次の年の欠員は両校とも0人となっています。中学校卒業生数が15人増えた中で、いくらか定員を超えて志願者が集まりました。何人かの志願者が入れなかったのですが、先ほどもこれまでの経緯のところでも少し説明しましたが、平成25年度にそれぞれの学校で活性化について議論を随分していただき、その活性化の取組が功を奏し、県外流出が減ったこともあり、2校とも欠員を生じませんでした。その次の年がこの春ですが、中学校卒業生数が41人減る中で、欠員は木本高校

15人、紀南高校16人の31人となりました。

どのように生徒が動いてこのような状況になったかということについては、後ほどの資料で説明させていただきます。

その下が、この地域の入学定員の推移予測です。これまでの入学定員は《参考》の上の欄に240や200と示してあります。平成28年度につきましては、先日、7月7日の朝刊に出ていたと思いますが、既に発表をしまして、木本高校が200人5学級、紀南高校が120人3学級で合計320人8学級と決まっています。ただ、上のほうを見ていただくと尾鷲高校で1学級の減があります。

今後の入学定員の予測は、上の人数の推移を見ながら出しています。平成29年度が7～8学級となっていますが、8学級ということもあるでしょうし、今欠員が31あるので、平成28年度に12人増えても県外への流出が多くなってしまうと、その次の平成29年度で「-15」とありますので、もしかすると減になる可能性もないこともないだろうという考え方から、7～8学級としてあります。その後、平成31、32年度では中学校卒業生数が大幅に減るので、少し学級数が減って6学級になる可能性があるのではないかと予想されます。その後は、ずっと6学級程度となります。

今後、傾向が変わってくることもあるかと思いますが、断定的には書かず、何学級程度という書き方をしています。今の人数から、今の傾向がこのまま続けば、このような予測になっていくのではないかとということです。

資料3ですが、昨年度の協議会で、さらにその先の子どもたちの数はどうなのかということは何人かの方からご質問をいただきましたので調べてみました。これは紀南地域の小学校への入学見込数で、住民基本台帳から各市町教育委員会のご協力を得て拾った数です。実際の子どもたちの数によったものですが、平成28年度入学見込数というところが、合計249人になっています。これは平成28年4月1日までに満6歳になるという子どもたちです。同じような数が合計欄に並んでいますが、平成33年がその前年に比べて50人ぐらい少なくなります。これは平成28年4月1日までに満1歳になる子どもたちです。

資料2と資料3を見ていただくときに、少し注意していただく点があります。資料2と資料3は同じ人数のベースで出しているものではありません。資料3は、住民基本台帳から実際にいる子どもたちの数を5月1日現在で拾い出したものです。資料2は、タイトルに「(含社会増)」と書いてあります。どういうことかといいますと、例えば、昨年度来いろいろ話題になっていますが、小学校を卒業するときに、私立中学校に進学する生徒が、ここ3年間で見ると、多い年で19人、少ない年でも12人いました。もしくは、それぞれの節目の学年で転出していたり、転入して来たりする子どもたちも若干います。そういう過去3年間の変動率を掛けてこの数字を出しています。ですので、実際の小学校の在籍人数ではありません。平均して10数名が他県の中学校へ行っているわけですので、その分も考えてその割合を掛けています。実際に小学校に在籍している人数ではなく、中学校を卒業するだろうという予測に基づいています。資料2と資料3については、計数のベースが違うことをご承知おきください。

続きまして、資料4に移ります。随分たくさん数字が並んでいますが、一番上が平成27年度の入学者数で、一番下が平成23年度の入学者数です。5年間のデータで

すが、7ページが木本高校、8ページが紀南高校と分けて書いてあります。抜粋して説明したいと思います。

木本高校の資料で、平成27年度入学数が4段に分かれています。そこで網掛けになっている熊野市の合計をご覧ください。中学校卒業生数が140人、これは熊野市の中学校卒業生数です。そのうち、木本高校への入学者数が93人、木本高校の入学者に占める割合は50.3%です。それを前の年と比べると、平成26年度入学者数は95人、47.5%で、平成27年度のほうが人数は減っているのに割合が高くなっています。その理由ですが、平成27年度は欠員が生じて、全体の数が少ないのでこのような割合になっています。

割合に着目すると、熊野市は47.5%や50.3%であまり大きく変わりませんが、御浜町については、人数も大きく変わっていて、割合も25.5%から18.9%となっています。紀宝町は割的には24.5%と22.7%であまり大きく変わらない感じがします。

では、どこが増えたかというところ、尾鷲市のところです。平成26年は入学者が3人でしたが、平成27年度には12人と増えています。この春の入試では、尾鷲市から木本高校には、この5年間を見ても一番多い12人が入学しています。割合で見ると6.5%になり、今春の特徴ではないかと思えます。

同じように紀南高校を見ていくと、人数で比べるよりパーセントで比べたほうがいかにもわかりませんが、熊野市は30.0%から28.8%と大きくかわりません。御浜町は34.2%から25.0%と減っていて、逆に紀宝町が32.5%から40.4%と増えています。ここでも紀北町から昨年は0人でしたが、今春は3人来ています。資料としては5年間分を示していますが、説明としては平成26年度と平成27年度を比べてみました。もう少し古いところは、各委員でご覧いただければと思います。

次に、資料5に移ります。タイトルが「東紀州地域の高等学校の進学希望状況比較と入学者数」となっていますが、県教育委員会では、7月と12月に、中学校3年生に対して「進路希望調査」を行っています。どこの高校もしくはどのような進路を取りたいか一つだけ書いてもらうという調査ですが、その調査と実際の入学者数を並べて書いてあります。木本高校、紀南高校の7月と12月と比べていただきますと、木本高校は7月から12月にかけて減っていて、紀南高校が7月から12月にかけて増えており、全部が全部そうではないかもしれませんが、木本高校を希望していた生徒の幾分か、12月にかけて紀南高校に変更していると言えるかと思えます。

少し気になるところが「県外」というところです。県外高校・高専のところ、熊野市は実際の入学者数と同じですが、御浜町で11、紀宝町で18という欄に合計40という数があります。そのすぐ下が和歌山県、この40人のうち、和歌山県の高校に行った生徒は、熊野市が8人、御浜町11人、紀宝町が16人の合計35人です。その内訳を下に※印で書いてありますが、熊野市の8人は、全員が近大新宮高校です。御浜町の11人も全員近大新宮高校です。紀宝町は地域によって公立高校に行くこともできますので、11人が近大新宮高校、4人が県立新宮高校、1人が新翔高校です。かつて新宮商業高校というのがありましたが、何年か前に総合学科に変更になり、新翔高校という校名になった学校です。

この数はどうかというと、1枚めくった11ページの同じ欄を見ていただくと、増えたところと減ったところがあります。熊野市は13人から8人と若干減っていますが、御浜町が昨年度、近大新宮高校への進学者が1人だったのが、今回は11人と非常に多くなっています。その辺が前のページの資料で見ていただいた木本高校、紀南高校への入学者割合が低くなっているという理由ではないかと思っています。

紀宝町も8人から11人と近大新宮高校へ進学した生徒が増えています。

前年度は熊野市、御浜町、紀宝町を合わせて近大新宮高校へ進学した生徒が22人でしたが、今春は30人ということです。今日は説明しませんが、過去5年間の資料を載せておりますのでご覧いただくと、この5年間で多い人数だったということがわかります。

次に資料6をご覧ください。この地域には木本・紀南両高校のほかに、木本高校の定時制がありますので、その現状についても、高校を取り巻く状況ということで知っていただきたいと思い、毎年、資料に上げています。木本高校の定時制についてですが、1にあるように、普通科で1学年40人の定員となっています。2の入学者の推移ですが、一番新しい平成27年度は2人でした。3は在籍者数です。4についてですが、平成23年度から通信制高校との連携併修に取り組んでいます。これは四日市市の北星高校という学校に通信制がありますが、その高校との併修ができるというものです。通信制では面接指導をすることになってはいますが、北星高校に行かなくても、木本高校の定時制の教員によって北星高校通信制の面接指導や試験をやってもらうことができ、北星高校通信制の単位を修得できる仕組みです。そして、取得した単位を木本高校定時制の卒業に必要な単位として生かすことができ、3年間で卒業することもできます。今は2年生3人、3年生1人がこの制度を利用して併修をしていることも、学校の学習形態として知っていただきたいと思います。

次は、資料7、木本高校・紀南高校の進路状況です。木本高校普通科について、平成26年度と平成25年度を比べると、四年制大学への進学者数、割合も大きく変動していないということで、普通科はあまり大きな変化はないかと思っています。総合学科については、割合的には四年制大学進学者が減って、就職や専修学校の部分が増えているのが今回の特徴かと思っています。

紀南高校については、今回、就職が47人で50.5%、専修学校が21.5%ということで、平成25年度よりも就職の割合が減って専修学校の割合が増えてきています。平成23年度や平成24年度も同じような割合で、就職に関しては50%ぐらいでしたので、そのあたりの状況等から見て、平成25年度は就職の割合が少し高かったかということが、データから見てとれると思います。

最後に、資料8です。昨年度の協議の中でご質問もいただき、木本・紀南両校の津波浸水被害予想の数値的な資料をお出しする話をさせていただきましたので、三重県の調査に基づく予想から資料として用意しました。木本高校の浸水予測は0.3から1m、水深30cm到達予想時間が30分から40分です。紀南高校の浸水予測は2～5m、水深30cm到達予想時間が30分から40分です。このようなデータが出ていますので、お示しさせていただきました。

説明は以上です。よろしく申し上げます。

### **(大森会長)**

事務局からの説明に対して、何かお聞きになりたいこと、あるいは、さらに付け加えていただくような情報がありましたらお願いします。

甫本委員、1年目で申し訳ないですが、先ほどありました近大新宮高校への進学者が増加した要因は何かあるのでしょうか。

### **(甫本委員)**

近大新宮高校ですが、進学に力を入れていることから、希望が増えていることはあるかもしれませんが、はっきりとは分析されていません。

### **(大森会長)**

ほかに何かございますか。

それでは、事項書「5 協議事項」に入ります。まず、平成27年度の協議会の進め方について、まず事務局から説明願います。

## **5 協議事項**

### **(1) 平成27年度の協議について【資料9】**

#### **(事務局：辻班長)**

それでは、22ページの資料9をご覧ください。

まず、「1 平成24年度以降の協議の経緯」については、先ほど報告事項で説明させていただいたとおりです。それを踏まえた「2 協議の方向性」としては、まずは、(1)にありますように、木本高校、紀南高校の両校の特色化・魅力化を中心とした地域全体の教育の活性化を図るために、特色化・魅力化について協議するということです。その観点としては、「生徒にとって魅力ある学習環境の整備」、「高校による地域活性化・地域貢献」、「地域資源の活用」、「小・中・高等学校の連携」です。

(2)は、これも前年度までの協議を踏まえたと、将来的に新たな学校を設置する場合、つまり木本高校が1学年5学級、紀南高校が1学年2学級を維持できない場合の統合校の学校像等について、特に、学校のコンセプト、学校のイメージの具体化に向けた教育活動という点から学校の特色を具体的に協議いただきたいと考えています。先ほど私から説明しましたが、昨年度までの協議で資料12にまとめたところまで協議いただきました。さらに、今申し上げた点から、学校の特色についてご協議をいただきたいということです。

「3 協議会の開催時期と内容」についてですが、今年度は協議会を4回開催させていただくという予定を立てています。本日、第1回(7月10日)ということで今進めているところです。第2回・第3回で、将来的に新たな学校を設置する場合の学校像等についての協議を引き続き予定しています。途中からみえた方もいますので、冒頭、課長から説明させていただきましたように、本日については、学校の設置場所についての協議は控えさせていただきます。場所にかかわって、あまり具体的な場所を出し合ったり資料化したりすることは、その土地の所有者にご迷惑がかかる可能性、利権問題に発展し混乱を招く可能性があるのではないかとということからです。今後、どのような形での協議ならば可能か等、事務局で検討し、改めて提案させていただくと申しあげましたので、この資料9の協議の内容についても、場所についてのことは

除かせていただいていますのでご理解ください。

**(大森会長)**

重ね重ね確認になりますが、協議会という名はついておりますが、この協議会では、この地域の子どもたちの教育についての意見を出し合ってまとめていく場ですので、ここで場所を決めるということではありません。昨年度、私が会長のもとで、場所についても皆様のご意見を伺うということでもとめさせていただきました。いただいたお話をいろいろと検討させていただきましたが、現状として出すことによって皆様にもご迷惑をおかけしますし、それぞれの委員の責任を問われかねないことが起き得ることがわかってまいりましたので、今回につきましては、学校像についてのみ皆様と協議し、意見交換させていただきたいと思っています。

つきましては、この進め方について何かご意見、ご質問等がございましたらお願いします。

**(田尾委員)**

本日は、具体的な場所については協議をしないということですが、新しい校舎を建てるという方向性でいいということでしょうか。まだどちらかの校舎を利用するという考えも持っているということですか。

**(事務局：宮路課長)**

3 ページの資料1の平成24年度のまとめの部分をご覧ください。いろいろな災害等に配慮して新しい場所の検討をする必要があるという意見をたくさんいただきましたので、附帯事項を付けてありますが、あくまでも県立学校については、既存の教育財産を活用することを原則に進めてきています。ですので、今おっしゃったように新しい場所に建てるということが今決まっているとかの方向性はまだないご理解いただきたいと思います。ご意見を聞いて、今後、そういうことも考えていきますが、現時点はこのところを踏まえてということでご承知おきください。

**(田尾委員)**

理解はできますが、新しい校舎を建てたうえで、いろいろなビジョンを立てていくという方法と、現在の校舎を利用するのでは考え方が変わってくると思います。それと、新しい校舎を建てるとなると、少なくとも3年以上はかかると考えられますので、今年度中に決めていかないと、多分難しくなりますし、この協議の内容も変わってくると思いますので、早急にお願いしたいと思います。

**(大森会長)**

ただ、今日はということによろしいですか。あと、ご意見、ご質問等ございますか。

**(莊司副会長)**

少し戻りますが、津波浸水被害の予想は、何mの津波を想定したものでしょうか。

**(事務局：宮路課長)**

津波が水面から比べて何mかというのは、今、資料を持ち合わせていないですが、その場所でこれだけの津波があると県が予測したものです。例えば30mも来て、高いところに行けば1mということがあると思いますが、木本高校の位置でこれぐらいの予想、紀南高校の位置でこれぐらいの予想という数字です。

**(大森会長)**

莊司副会長が言われるのは、想定というのが、どれぐらいの規模の地震が起きたら、この浸水が起きるのかという意味ですか。

**(事務局：宮路課長)**

申し訳ありません。今の浸水は最大で予測した場合のものです。

**(大森会長)**

東海・東南海・南海地震が連動して起きたときに発生する浸水予測ということです。

**(莊司副会長)**

理解力に乏しいので、規準になる高さがあるとわかりやすいと思ったのですが、今は持ち合わせていないということですね。

**(寺本委員)**

関連してですが、木本高校の場合は、堤防を越えてきての話ですか。

**(事務局：宮路課長)**

今の予測では、堤防を越えてこの浸水被害、いろいろな条件が変わればということではありますが、今のところ、最大でこの程度の津波浸水が木本高校の位置で来る可能性があるという予測です。具体的に細かく調べていないので、担当部局に確認し、次回以降にもう少し詳しいものが出せるようにしたいと思いますが、今日のところはこの数字しか持ち合わせていません。

**(谷合委員)**

私の推測も入れてですが、例えば木本高校の場合は30cmの津波が何分で押し寄せてくるかということです。私が調べたのは、30cmの波に人間がのまれると、身動きがとれないということです。この資料には30～40分と書いてありますが、私が見たのはもう少し時間が短く、15～20分だったと思います。その間に避難をする必要があると私自身は理解しています。

ですから、今ご質問があった何mの津波が来るという前提での話というより、私は、避難するまでにどれだけ時間の余裕があるかという理解をして、校内あるいは学校周辺の避難経路を想定し、生徒たちの避難訓練に反映させています。ぼけてしまうかもしれませんが、例えば10メートルの津波が来たときに何分後ということではないと思います。私の推測も入っています

**(大森会長)**

2回目の協議会で詳しく説明するというごことをお願いします。

22ページの資料9につきまして、何かご意見、ご質問等がございますか。

**(樫山委員)**

協議の方向性の(1)ですが、昨年度からこの場に出ささせていただいての印象として、木本高校、紀南高校それぞれの特色化・魅力化についての議論は、各高校からの報告を受けただけで、失礼な言い方かも知れませんが、それをどうしていくという協議にはなっていなかったと思います。当然それぞれの高校、紀南高校であれば学校運営協議会、木本高校であればサポート委員会で、特色化や魅力化について十分な議論がなされていると思いますし、それぞれの取組もされていると思います。

その報告を受けることに昨年度は時間を随分取っていたのではないかと思います。

当然必要なことですし、実際にそれぞれの学校運営協議会やサポート委員会でなされていますので、紹介していただけるといいのですが、そこにあまり時間をかけずに、できれば（２）のほうに時間を割いていただきたいです。将来的にというのは、１０年も２０年も先ことではないのです。目の前に迫っているということで、ここの部分の協議を進めていただけたらいいかと思いました。（３）の協議の開催時期と内容を見せていただくと、そのことを踏まえてくれているとうっすらとは見えますが、そのあたりを教えてください。

**（大森会長）**

私のほうから、お二人の校長先生には申し訳ないですが、資料１０、１１についての説明は短めというお願いはしています。

残り２つについては、事務局からいかがでしょうか。

**（事務局：辻班長）**

時期的なことはこのように設定させていただいていますが、２月の第４回のところでまとめさせていただきたいと考えています。本日も、昨年度末までに協議した学校像ということで資料１２にまとめていますが、これをさらに詳しくした学校像は、今後協議することで出せていくのではないかとということです。

**（谷合委員）**

２５ページの資料１２の捉え方ですが、私の理解では、昨年度、いろいろな関係者から意見集約したものを、この場を出していただいて、私の言い方でいえば、それを会長にぎゅっとまとめていただいたと理解しています。ですので、これはあくまでたたき台であって、これがあるという前提で次の話ということではないですね。その辺を確認させていただきたい。ここに書かれていることがすべて含まれ、なおかつ、次に何を加えていくかということではなく、資料１２についても、細かく見ていけば、本当にできるのだろうかということもありますので、ここから削ることもあるだろうし、変えることもあるだろうという理解でよろしいですね。

**（大森会長）**

私もその考えでいます。よろしいでしょうか。

それでは、続きまして、「木本高校・紀南高校の活性化に係る平成２７年度の主な取組について」の協議に移りたいと思います。まず、資料１０、１１につきまして、木本高校、紀南高校の順に説明をお願いしたいのですが、１校あたり１０分以内で、特に今年度新しく強調されたい点を中心によりしくお願いします。

**（２）木本高等学校・紀南高等学校の活性化に係る平成２７年度の主な取組について**

**【資料１０、１１ 及び参考資料１、２】**

**（谷合委員）**

２３ページをご覧ください。大きく１番から４番まで番号がふってあります。昨年度から、あるいは、それ以前から取り組んでいることについては、割愛させていただきます。

１の（５）総合学科２年次生について、今年度、やっとインターンシップが動き出しました。具体的には１２の事業所に協力いただき、総合学科８０人のうちの１４人

がこの授業を選択して取り組み出したところです。実際には9月以降に10数回お世話になりが、1学期中にいろいろな打ち合わせということで1回ないし2回、事業所を訪問させていただいています。

2については、書いてあるとおりです。

3の「学力の向上」というところですが、(1)は、昨年度も同じ企画を1年生だけがしましたが、今年は1年生と2年生で実施するという欲張った企画をしました。

(2)についても、同じようなことです。1年生は尾鷲高校と合同で、2年生は本校単独で実施します。(3)については、昨年度、7月は尾鷲高校に相乗りをさせてもらいましたが、今年度は7月、12月ともに本校で実施します。ただ、残念なことに7月については、本校の希望者は3年生の4人のみと少ないのですが、少数精鋭ということで頑張ってくれるかと思っています。(4)は、今年新たな企画で、堅い書き方をしています。「講義動画サービスの活用」は任意ですので、希望する生徒を募ってということで、2回に分けて募集をかけました。1年生から3年生までの80人がスマートフォンやパソコンを使って、中学校1年生から大学受験レベルまでの講義の動画を5教科中心に見られるというものです。隙間の時間をどう活用するか、図書館も若干、環境整備をしましたので、この辺も現在も常に使ってくれている生徒がいます。パソコンを置いて、昼休みや放課後に講義動画を見て、自習をするというようなことです。

(6)は、来年度に向けての準備ということですが、3年次生の選択で「国際英語」というのがあり、木本小学校に協力いただき、選択した生徒が小学生に英語を教えることができればよいということで、熊野市教育委員会、木本小学校には、今、相談を持ちかけている状況です。

(8)は略称「Mie SELHi」という言い方をしますが、本年度が指定の最終年度ということで、英語の指導力向上に向けたいろいろな事業をやっています。当然中学校や、場合によれば小学校の先生方にも呼びかけをしてということで、今年度も8月の末に研修会の企画をしています。合わせて授業公開も11月5日に予定しています。

4の(3)は、昨年度の秋に1回だけ行いましたが、保護者対象の進学セミナーです。今年度は既に6月6日に行っています。60数名の保護者に参加をいただきました。2回目は11月2日を予定しています。

(5)は定時制にかかわってですが、定時制は4年次生で本来は終わりですが、いろいろな事情で5年次、6年次という生徒がいますので、単位を修得しやすいように2学期制を3学期制にできないかとか、教育課程を工夫して単位を取りやすくできないかとか、資格を単位として認められないかという検討を今行っています。

要約した形になりましたが、大体こういうところです。

### **(堀川委員)**

紀南高等学校は今年の6月1日付で、おかげをもちまして5度目のコミュニティ・スクールの指定を受けることができ、9年目を迎えました。従いまして、紀南高校としては、コミュニティ・スクールとして地域連携をベースとした教育内容の充実をいかに図るか、これに尽きるのではないかと考えます。

大きく4つ、そこに取り上げました。

「1 コミュニティ・スクールの理念を活かした地域とのコラボレーション」です

が、もっと噛み砕いた表現をすれば、開かれた学校づくりと言い換えることができるかと思います。(1)と(2)のそれぞれについては、昨年度もやっていた取組を継続推進していきたいということです。例えば(1)のアとイのところは、教育ボランティアや聴講生、外部講師等々として地域の人材をお招きすることにより、生徒にほどよい緊張感がもたらされたり、多面的な学習機会が保障されたりするという一方で、教育効果も非常に高いので、更に推進をしていきたいと思っています。

また、ウについては、地域の教育資源を活用させていただいて、生徒の生きる力の育成につなげていきたいと考えています。

エとオについては、本校の教育資源の活用ということです。施設や設備を開放するほか、本校にいる専門的なスキルを持つ教員を活用するなど、地域の方とかがかわることによって、地域との連携に弾みをつけたいと考えています。紀南高校をさらに知っていただく機会、また、生徒がアシスタント等として参加させていただくことによる異世代交流の機会、あるいは、コミュニケーション能力を高めていく一つのきっかけにもなるので、継続・推進をしていきたいと思っています。

特に(2)ですが、アの学校設定科目の「東紀州学」は御浜町教育委員会と連携した科目活動ですが、おかげをもちましてこのほど冊子の刊行にたどり着くことができました。また機会があれば見ていただきたいと思っています。

さらに、エの人権サークルと地域の交流については、昨年度立ち上がったばかりですが、さらに活動の輪を広げていきたいと思っています。

「2 キャリア教育の充実と生徒一人ひとりの進路実現」ということですが、紀南高校といえばインターンシップとコミュニティ・スクールの2つが、この地域での代名詞のように思っています。今年度も地域の協力を得ながら、1年を通したインターンシップを実施しています。実習生徒の数が年々増えていまして、本年度は62名が、熊野市から新宮市までの範囲で39の事業所に受入れ協力をいただいています。この数字でおわかりのように、今後、受入れ事業所の掘り起こしが最大の課題となっています。1つの事業所で複数名、多いところでは5、6人の生徒を受け入れていただいています。また、学校だけの力ではなかなか行き届かないところがありますので、学校運営協議会の皆様をはじめとして、地域の方の協力を得ながら、受入れ先の開拓に努めたいと思っています。

2の(2)の特にウの基礎的・基本的な学力の定着についてですが、特に本校は就職希望者が多いので、就職試験に対応できるような学力をいかに定着させるか、身につけるかということで、これまでは朝の会などを利用した一般常識テスト、「ちりつも」学習と呼んでいます。これを日常的に積み重ねることを中心に展開してきました。本年度からは、より継続的・効果的にということで、(ア)1年生の国語と数学と英語それぞれの科目について、1コマ50分の授業の一部を活用しながら、学び直しのための教材を用いた学習を展開しています。さらに、来年度は学び直しのための学校設定教科目の開設が決定していますので、この開講に向けた指導内容や指導方法を、現在の教科の中での取組の状況等も踏まえ、より効果的に展開できるよう運用面の研究検討を図っているところです。

「3 安心・安全に学べる学校づくり」についてですが、(1)はこれまでもずっと

続けていることですが、例えば、「あいさつ運動」、「花いっぱい運動」は非常に地道な活動です。これを日々積み重ねることによって教育効果が上がるという手応えを得ていますので、今後とも続けていきたいと考えています。

(2) 生徒理解に向けた取組についてです。内面に課題を抱えた生徒が年々増えています。しかも、実態がますます複雑化しているように思いますので、特に生徒理解に向けてということで、アの特別支援教育や教育相談に係る職員研修を昨年度も実施しましたが、さらに充実を図りたいと思います。スーパーバイザーの先生をお招きして事例検討を行ったり、学校外での教育相談に係る研修受講の機会も幅広く設け、それを全職員にフィードバックしたりすることを計画しています。

イは、今年度が初めての取組で、生徒理解として、生徒理解や指導にかかる心理検査を活用しようということです。年に2回実施してその結果を分析し、生徒の支援につなげていきたいと考えています。今現在、進行中です。

「4 生徒の進路実現につながる「学力の向上」を核とした小・中・高連携」は、ますます大切になると思っています。(1) 小・中・高間の教員交流の取組ということで、これまでも継続しています近隣の小学校、中学校とタイアップしたキャリア教育合同実践事業を、さらに幅を広め深めたいと考えています。紀南高校の生徒のほとんどが、熊野市から南牟婁郡で育った生徒であり、小学校から高校卒業までの12年間を地元で過ごすこととなります。ですので、小・中・高が学校種を越えて12年間で生徒の生きる力をどう育むか、また、身につけさせなければならない力は何かなどについて、忌憚のない意見交換をさらに深めていければと思っています。

(2) 小・中学校の教育活動への本校生徒の参加ということですが、先般も、昨年度インターンシップを経験した生徒が阿田和中学校の職場体験の事前学習に招かれました。これは、本校の生徒にとっても、昨年度1年間の取組を振り返る恰好の機会になるとともに、発表という機会を与えていただくことによって、コミュニケーション能力を育むという貴重な機会になりますので、もっとこの幅を広げていきたい、また、いろいろなところからお呼びいただければと思っています。また、福祉の関連科目を履修している生徒が、近年、阿田和小学校に先生役としてお招きいただいた経験も非常に貴重でしたので、近隣の小学校、中学校、高校との交流を生徒・教員ともにさらに充実させていければと考えています。

#### **(大森会長)**

今、両校の活性化推進に関わり、今年度の取組についてお話をいただきました。ここは紀南地域高等学校活性化推進協議会という場所ですので、まず、高校による地域活性化・地域貢献、小・中・高の連携、あるいは両校の担うべき役割、そして、生徒にとって魅力ある学習環境の構築という観点から、ご意見、ご質問、ご提案等がございましたらお願いします。

寺本<sup>育</sup>委員、中学校の先生として両校の先ほどのお話について、何かご意見、ご質問、ご提案はございますか。

#### **(寺本<sup>育</sup>委員)**

木本高校、紀南高校の取組を、資料12のたたき台と見比べていました。将来の学校像の中身がこの中にいっぱい入っていると感じながら見せてもらっていたところで

す。今、中学生を見ていますが、この前、2年生の生徒と話をしたら、高校ではどのようなことを学習するかわかっていない生徒が多いです。木本・紀南両校のやっている取組を高校説明会等で中学生に知らせていただければと思いました。

#### **(山本委員)**

小学校の立場からすると、高校と小学校には距離があり、なかなか親近感がわかりませんが、今年、木本高校からインターンシップということで木本小学校へ何人かの生徒が来られるということを経理から聞かせてもらっています。その中身の話にまではなっていますが、楽しみに思っています。

一個人としては、私の子どもも木本高校、紀南高校の両方にお世話になりました。先生方にも大変お世話になり、今も大学、就職で頑張っていますが、先ほどの話の中でも、両校ともにそのような取組をしてもらって、本当にありがたいという感想です。

#### **(南本委員)**

今後の紀南地域の学校を考えるとということで、それぞれの学校が基本的には生徒の進路実現を踏まえながら、木本高校は進学指導も充実させながら、今年度初めてインターンシップという形で、子どもたちの幅広い自己実現に向けて活動をしていただいているのはありがたいことと思います。

それと、先ほど堀川委員が言ってみえましたが、昨年度に続き今年度、私ども阿田和中学校へ高校生に来てもらい、インターンシップの実践発表会をしていただきました。今まで中・高というのは、入試を境にしたつながりがありましたが、もっともっと連携をしていくべき状況にあると思います。また、学力の部分では小・中・高の連携についてここにも書いていただいていますし、私どもも考えている中・高の連携イコール小・中の連携も、この視点で今後考えていかなければならないと感じました。

#### **(徳田委員)**

両校とも文字には載っていない部分で、生徒の自己実現のために、素晴らしい取組を続けてくれていることにまず感謝します。

意見と要望が混じっていますが、小学校ではある程度学校をオープンにして、保護者にも地域の方にも、基本的にはいつ学校に来て子どもたちの授業を見てもらっても結構ですと伝えていきます。特にいろいろなイベントがあるときには案内を出し、なるべく多くの方に子どもたちを見ていただくという取組も進めています。両校とも授業公開や研究授業のことを書いていただいています。その情報がなかなか入ってきにくいところもあります。特に中学校の生徒や保護者に向けての授業公開があれば、もっと高校が身近になって、進路も身近になるという気がします。

数年前に近所の保護者の方から、ある高校の授業参観に行ったら自習でがっかりしたという話を聞いたことがあり、しっかりとした情報をいろいろな機関を通じて、中学校、小学校、地域や保護者の方へ出していただけるとありがたいと思います。生徒の様子や授業の様子を見ることで、安心感や進路選択につながると思うので、よろしくお願ひしたいと思います。

#### **(谷合委員)**

自習云々の話は本校の話かと思いますが、何年か前にそういうことがあったのは私も伝聞で聞いておりますので、そのあたりは十分意識して職員に指示を出しながら取り

組んでいきます。ただ、実際には日常の授業において自習は起こり得ます。いろいろ出張が入ったり、やむなくということもあつたりしますが、授業公開のときについては、そういうことが起こらないように努力し、ほとんどない状態にしています。

それから、いろいろな案内ということですが、本校は授業公開をしても保護者の方が参加されることは極めて少ないという逆の悩みがあります。情報については、当然本校の生徒の保護者には伝えていきますし、いろいろな機会を通じて市や町の教育委員会、校長先生方にも案内をお出ししています。しかし、中学校を飛び越えて保護者までとなると難しいところもあります。私たちとしては、中学校や小学校の先生方については、いろいろなイベントがあるときには、必ず案内を出すようにしていますので、そのことだけわかっていただければと思います。

#### **(大森会長)**

先ほどの高校の情報公開、地元の方への情報についてですが、飯南高校は1年に何回か出す学校の広報を、自治会を通じて回覧板に入れてもらっています。そのようにして、飯南・飯高地区の自治会を通じて住民に学校を知ってもらう取組をここ数年ずっとやっておられます。あるいは、みんなが集まりそうな場所があれば、高校では公共の掲示板に張る取組がされていますので、そういう方法もあるかと思います。

#### **(中田委員)**

私の子どもは中学校1年生と2年生、そして中学校卒業生数が一番少なくなる小学校5年生にいます。私の勉強不足ですが、木本高校や紀南高校がこんなに素晴らしい取組をしていることは、今日、ここで初めて知りました。家では木本高校、紀南高校のイメージがあまり良くなって、相可高校へ行こうとか近大高専へ行こうとか、そういう寂しいことを言っています。保護者としては地元の高校に行ってほしいですし、木本高校も紀南高校もこれほど素晴らしい取組をしているのに、PRが下手というか、私たち熊野の人は、商売をしてもPRが下手ということもあります。こういうことを小学校、中学校の保護者にもどんどんPRして行ってほしいと思います。

#### **(大井委員)**

同じ公立高校でも、それぞれ特色が違い、大変興味深く拝見しました。私の娘も今、木本高校の1年生に在学しています。仕事柄、紀南高校の生徒をよく見かけることがありますが、よく挨拶をしていますし、私もされたことがあり、大人の私が感心しています。両校とも特色ある学校運営をしていることが十分理解できました。

#### **(田尾委員)**

先ほど中田委員が言われたように、私は紀南高校も木本高校も注意しながら見ていますが、ほとんどの人にこのような情報が伝わっていないか、伝えていても見てくれないという状況です。紀南高校の場合は、「紀南の風」という広報を御浜町、紀宝町内にはすべて配布していますし、熊野市方面の学校等へも配布していると思いますが、どこまで見てくれているのかということで、見てもらいやすいような形を工夫していますが、なかなか見てもらえずに捨てられるのが現状という感じがします。

ほとんどの人が取組内容ではなく、ただ学力や部活動という大ざっぱな結果で見る人が多いので、その辺の情報も伝えていくといいかと感じます。

### **(莊司副会長)**

進学と就職を意識した学校ということですが、小中学校との連携で気になったのは、学力のことです。学力があれば就職、進学も選択できると思いますが、試験で点数を取れないと、進学や希望する職種にも就職できないということが現実問題あると思います。そういうところの連携はどのように取られているか教えていただきたい。

### **(谷合委員)**

今のご質問の意図は、高校から先の上級学校への進学や就職に関わる学力向上という意味での連携ということなのか、高校入試をクリアするための連携という意味なのかでしょうか。

木本高校としては、高校で終りではなく、当然その先に就職や進学があるという考えです。どちらにしても一度、この地を離れる割合は大きいので、その意味ではいろいろな力をつけてやらなければならないということで取り組んでいます。また、ここにも書きましたが、昨今はいろいろな機器を使い、段階的な刺激を与えていきたいということで、好きな時間を利用して講義の動画をみるということも考えています。

それから、回数は多くないですが、予備校の講師の方に来ていただいて、ワンポイントレッスンみたいなことをやってみたり、進学関係の業者に来ていただいて、本人たちだけではなく保護者への情報提供の場を持ったりしています。この辺が、今質問いただいた部分の連携にあたるのかどうか自信はないですが、学校の中だけ、教員だけで情報を伝える、勉強をさせるということのみではなかなか厳しいだろうと思います。ですので、外部からの刺激をいろいろな形で与えていく必要があると考えています。特に出口保障の部分では、今お話したようなことを行っています。

木本高校については、人間性を磨いていくという意味での取組は、模索を始めたばかりです。この辺は中学校や小学校、あるいは地元の事業所に協力いただきながら、例えば、人数はまだ少ないですが、インターンシップのような形で人間性を磨くことも進めていきたいと考えています。

ご質問に対する回答になっているのかどうかよくわかりませんが、以上です。

### **(堀川委員)**

ご質問いただいている連携にあたるかわかりませんが、紀南高校では、例えば、小中高のキャリア教育合同実践事業というものを行っています。従来に比べると規模が小さくなりましたが、小中高の先生が、例えば、1学期は高校の授業を、2学期は中学校の授業を、3学期は小学校の授業を見合う取組を行っています。私も昨年度、小学校の算数の授業を見せていただく機会がありました。ある程度継続してできるといいと思います。まず、このような取組から始めることが大切だと思っています。

紀南高校には、小学校段階、中学校段階の学習内容を学び直す必要がある生徒も少なからずいます。かけ算や分数の計算が苦手な生徒がいたときに、そのつまずきの原因であるとか、あるいは効果的な指導のノウハウ等を共有できればいいかと思っています。

### **(新谷委員)**

今の堀川委員のご発言に補足させていただきます。小・中・高等学校の連携ということについて、授業の公開だけではなく、授業後にはディスカッションを行っています。特に昨年度は、英語教育において、最初は紀南高校の教員が中学校に出向いて授

業を見せていただく、次は中学校の教員が紀南高校に来て授業を参観する、授業後にはどちらもディスカッションを行うという取組を行いました。このような取組を通じて、それぞれの指導方法の違いや、中学校ではどこまで教え、高校ではどのような形で発展させていくとよいか等の議論もしています。

最近では小学校にもALT（アシスタント・ランゲージ・ティーチャー）がいるので、紀南高校の英語教員が小学校へ出向き、その方との対応を支援する取組もしています。こういうところはまさに手弁当で、お互いの空き時間を見ながら取り組んでいます。

紀南高校、阿田和中学校、阿田和小学校は、歩いて5分の距離にあるので、小・中・高間連携が非常に行きやすい理想的な立地だと私は思っていますし、その中での各教科の取組を進め、まさに教育のレベルアップを考えた交流をしています。

#### **（莊司副会長）**

今の質問は言葉足らずでした。私が申し上げたかったのは、小中高がいかに連携しながらこの地域の優秀な人材を育てるかというところだと思います。そのことが高校自体の魅力を出すことにもつながるかと思いましたが、優秀な人材をどんどん育てていただきたいと思い、質問させていただきました。

#### **（倉本委員）**

紀南高校と木本高校の取組を聞かせていただきました。社会的なニーズや今日的な課題を踏まえ、特色を出そうと一生懸命努力されている状況が本当によくわかりました。あと、保護者や子どもたちのニーズの部分がどうなのか、そこにもう少し焦点を当てていただければありがたいと思います。

紀南高校はコミュニティ・スクールということで、学校運営協議会でいろいろな意見が出されるでしょうし、地域とかかわる中で意見を取り入れていると思います。木本高校も取組の中で地域の声を取り入れられていると思いますが、ニーズの大きさであるとか、子どもたちのニーズをもう少しキャッチしていただければありがたいと思います。

私が思うことの1つ目は、「命」ということです。自殺者数が交通事故による死亡者数を上回り、圧倒的に多い中で、学力も大事ですし、これからの社会を生きていく力を備えるのも大事ですし、しなやかに生き抜いていく力が備わっていけばいいと思います。2つ目は、委員それぞれに価値感が違いますし、いろいろな話がこの協議会でも出るとは思いますが、学校像について、もう少し具体的なイメージをつくっていかねばならないと思いました。

#### **（生駒委員）**

木本高校、紀南高校ともに、地域に根ざした子どもたちをよりよく育てていくという意気込みが感じられて、大変ありがたいと思います。

先ほど新谷委員もおっしゃいましたが、紀南高校、阿田和中学校、阿田和小学校の3つを頂点にした三角形を考えますと、その真ん中にコンパスを置いて円を描くと大体500mの半径の中に収まります。大変コンパクトな範囲で、小・中・高の連携教育が可能であると考えています。

御浜町の教育は、質の高い学びを推進するために、町内の全小中学校7校は、同じ

方向を見て学力を向上させる、人間性を豊かに育てるという理念を共有しながら取り組んでいます。具体的には、各学校の各教員は、必ず年に1回以上、授業を公開しなければなりません。その授業の公開は、近隣の学校及び保護者、地域すべての人に公開をしています。また、各学校は、それぞれ年3回以上、大学教員あるいは県教育委員会の指導主事と呼んで「公開研究会」というものを行っています。すべて学力を向上させるためにどのように授業を向上させればいいのかという観点です。そういった中で、ぜひ阿田和小学校、阿田和中学校、紀南高校が一緒になって頑張っていければと考えています。いろいろな連携の道もあると思いますので、これから模索していければと考えています。

### (西委員)

両校の取組について、これまでの取組と新たな取組の報告をいただきました。その中で、私の考えることをいくつか質問させていただきたいと思います。

わずかこの2年ほどの間に、国のほうでは、教育再生実行会議から第7次の提言まで出されたところです。そのうち、大学入試の大きな改革、もとより大学のほうで求める力、社会で求められる力が随分変わってきたのは、ご存じのことと思います。

小中学校についても、次期の学習指導要領において、特に重視することとして、「アクティブ・ラーニング」が言われています。これは既に来年度採択予定の中学校の教科書でも、しっかりと意識してつくったと言われているように、来年度から小中学校においてもアクティブ・ラーニングを意識した、受動型ではなく、能動型で学べる子どもたちを育てていくことに方向転換を具体的に進めていく時期に来ているかと思えます。

ICTやSNSのサービス利用が、ハードとソフトと両方含めて当たり前の時代になって来ています。この進化により15年後には、今ある職業・職種のうち、いくつぐらいが残るのか、変わるのかと、新たに出てくるかということ考えたときに、今の子どもたちには、自ら課題を設定できる力、それをどのように解決していけばいいか道筋を立てる力、そして具体的に実行していく力が必要になってきます。

このことが、声高に言われている時代にあって、アクティブ・ラーニングをどのように捉えているのでしょうか。あと、次期学習指導要領では小学校高学年で英語の授業が実施されます。木本高校が計画している「高校生による木本小学校での英語授業」は、その授業のことでしょうか。それとも、今は英語の授業ではなく英語活動となっていますのでそちらなのでしょうか。英語授業でしたら、相当先進的ではないかと思うところです。それからもう1点、答えられる範囲で結構です。平成19～20年度頃に、矢渕中学校、井田小学校、阿田和小学校、阿田和中学校、紀南高校において「学校・地域との協働によるキャリア教育実践事業」が推進されました。このとき、キャリア教育において求められる4能力領域における8つの力が示され、こういった教育活動をして小中高で具体的に培うのか、小中高がどのようにつないでいくのか、高校で最終的に社会へ出せる力としてどの程度仕上げていくのかといった研究を行いました。4の(1)のアのあたりに書かれていることでは、それがどのように継続されているかを聞きたい。もし無理なら、昨年度1年、どういう形で実践されたのか。

### **(谷合委員)**

3の(6)は今の総合学科の2年次生が3年次生になったときの話で、国際英語を選択した生徒、人数的にはそれほど多くなく10名前後かと予想していますが、ある程度校内でトレーニングをして木本小学校で授業を行うものです。

### **(西委員)**

活動の内容はわかりませんが、今、小学校では英語の授業はしていませんので、次期の学習指導要領を先取りした取組なのか聞かせていただきたいということです。

### **(谷合委員)**

そこまでの具体的な詰めはこれからです。こういうことを高校で考えているので小学校に協力いただけないかというのが現段階です。それで内諾をいただきました。実際に松阪商業高校で実践をした教員が本校にいるので、その経験も活かしながら進めたいと考えています。英語の授業という言い方よりは、英語活動という言い方のほうがいいという気がします。

4の(1)アのところですが、これについては現在も継続してやっています。どちらかという、以前はイベント的に特定の部活動に所属する生徒に声をかけてやっていました。例えば防災プロジェクト事業についても、今は1学年の中で普通科と総合学科で日を分け、町歩きをして危険な箇所があるかないか確認し、それを班別に持ち帰ってきて、ホームルームで報告し合うような活動をやっています。

松本峠での英語によるガイド活動は、実際には年度末に部活動の有志が集まり、英語科教員の協力を得ながらある程度トレーニングをして取り組んでいます。平成26年度は三重大大学の留学生に来ていただいたとき、生徒に説明をさせました。地元紙にも報道していただいたと思いますが、そういう活動の内容ということでもないのですか。実際にそういう活動をやっていることをお伝えしたいのですが、お答えになりますか。

アクティブ・ラーニングについては、どこまでのことを言うのか、私自身も整理しきれていません。極端なことをいえば、昔風の講義式の一方通行以外であればアクティブ・ラーニングであると書いている本もありますし、そうではなくて、生徒を活発に動かすことがアクティブ・ラーニングであると書いている本もありますが、実際に本校の実情としては、私も授業を全部参観していますのでわかりますが、既に英語科ではそういうことを日常的にやっています。ただ、ある中学校でやっているような机を寄せ合っというようなスタイルではないですが、ある部分、講義でやりながらワンポイントというように形で生徒に意見交換をさせたり発表をさせたりということはやっています。教科によってかなりバラつきがあるのが現状です。1学期に先生方の授業を見せてもらったのですが、先生方には2学期の授業でアクティブ・ラーニング的な要素をどこかに導入する形でチャレンジしてみるよう課題を与えています。2学期にまた授業を見せてもらおうと思っています。少しずつ変えていければということは今やり出しています。

### **(堀川委員)**

アクティブ・ラーニングについては、まだまだこれからの取組だと考えていますが、教科・科目によっても違って来るかと思っています。本校も実際に教科・科目によっ

ては、アクティブ・ラーニングができるようなスタイルの授業展開をしているものもあります。例えば、先ほど話題にあげました「東紀州学」という学校設定科目は、まさに自然な形、緩やかな形でアクティブ・ラーニングという受けとめ方ができますので、そういう形に移行しやすいかと思っています。ただ、アクティブ・ラーニングはあくまでも手法だと思うので、最低限の基礎的・基本的な学力があって初めて意味をなすかと思っています。

#### **(谷合委員)**

私も堀川委員が最後におっしゃったことを言い足したかったのですが、アクティブ・ラーニング的なことをやればすべてが解決するわけではなく、当然前提として一定の知識がないと活用できないと考えています。言葉が先走っているような感じがしていますので、校長としてはしっかりと押さえていく必要があると思っています。

#### **(大森会長)**

大学でもそうですね。アクティブ・ラーニングというか、いろいろとプレゼン型の授業がありますが、まず座学でしっかりと基礎を固め、そのもとでのアクティブ・ラーニングというのが、今、大学で行っているものです。

お二人のPTA会長と廣畑委員、久保委員にもご意見等をお伺いしたかったのですが、時間の関係で次の項、「(3) 将来的に新たな学校を設置する場合の学校像等について」の協議に移りたいと思います。

この項の進め方についてですが、先ほど事務局から話がありましたように、設置場所に関しては大まかにどのようなご意見があったかを事務局から紹介いただきます。その後、学校像についての協議を行います。26ページ以降に学校像についての各委員のご意見や思い等がまとめられていますので、お一人ずつ説明をいただきたいところですが、時間の関係でまずは全体として事務局から説明いただいた後、意見交換をさせていただくということでお願いします。各委員のご意見を項目分けしてまとめた32ページ以降を事務局に説明願うことになると思いますが、そこに書き込まれてないことがあれば、ご意見としてお伺いしたいと思います。

それでは、最初に設置場所にかかわる大まかなご意見に関して、事務局から説明願います。

### **(3) 将来的に新たな学校を設置する場合の学校像等について【資料12、13】**

#### **(事務局：辻班長)**

学校像について、これからご意見をいただきますが、その前に設置場所について、大まかなご意見の紹介ということでお話をさせていただきます。いろいろなご意見をいただきましたが、大きく分けて2つのご意見があったかと思っています。1つは、現在の木本高校や紀南高校を活用していくというもの、もう1つは、新たな場所への設置というものです。

現在の木本高校や紀南高校を活用するという意見にかかわっては、防災対策の充実を合わせて行っていくべきだというご意見をいただいています。一方、新たな場所への設置については、具体的な地名はご紹介できませんが、1つは、熊野市内の高台の地域とする複数のご意見がありました。そこに行く交通手段としては、スクールバス

を走らせるというご意見や路線バスの経路コースに入れてもらうようにするというご意見がありました。また、御浜町地内についての複数のご意見がありました。そこへの交通手段としては、JRの最寄駅や最寄バス停からの徒歩もしくは自転車での通学というご意見でした。

このほか、具体的な場所は示していただいていたのですが、公共交通機関を利用して通学できる場所という意見もありました。

#### **(大森会長)**

このことにつきましては、今後、どのような形の協議が可能か、事務局と検討させていただき、改めて提案させていただきます。

これからにつきましては、将来的に新たな学校を設置する場合の学校像についての協議を、先ほどの進め方で行わせていただきたいと思います。設置場所につきましては、申し訳ございませんが質問等でも触れないようお願いいたします。

それでは、もう一度、将来的に新たな学校を設置する場合の学校像のたたき台について、事務局から簡単に説明願います。32ページ以降のところですよ。

#### **(事務局：辻班長)**

32ページ以降は、今回のたたき台に対して各委員から出していただいたご意見の中から新たなものをまとめたものですが、そういうことで説明させていただけばよいでしょうか。

#### **(大森会長)**

それでは、休憩を含めて読んでいただく時間にしたいと思います。その後、ご意見をいただくということでよろしいでしょうか。

25ページから34ページまでの間ですが、32ページから34ページの点線四角囲みの中が、新たなご意見・ご要望をまとめたものということです。

20時25分から再開ということをお願いします。

(休 憩)

#### **(大森会長)**

再開させていただきます。

32ページ以降のところをたたき台にしながら、皆様と意見交換させていただきたいと思います。32ページ以降については、25ページの資料12の図を分けた形になっています。

1つ目の学校のコンセプトについて、既に書かれていることで付け加えるとするなら、下の点線四角囲みの中にありますが、「命に重点を置いた指導を行う学校」ということです。安全対策や防災もこれに含まれるのではないかと考えます。また、望ましい高校生活を送れるような生徒指導を行う学校ということにもなりますし、紀南地域への愛情や規範意識、社会性を育む学校ということにもなりますので、「命に重点を置いた指導を行う学校」と入れるべきではないかと考えています。

2つ目の学校のイメージについて、皆様からご意見をお伺いしたいのは、昨年度までですと、「普通科」と「自らの進路を探究し、実現を目指す学科」ということではありましたが、今回の皆様の意見をお伺いしていると、後者は総合学科という意味かと

感じています。そこで、この「自らの進路を探求し、実現を目指す学科」というのを総合学科と書かせていただいてもよろしいでしょうかという提案です。林業科というご意見もありますが、総合学科であれば、林業等についても学べるようにすることができるのではないかと考えております。

3つ目の学校の特色については、コミュニティ・スクールの導入、学習と部活動の両立を重視したということです。熊野フェスティバルと言われるように熊野スタジアムを中心として、全国からいろいろなチームが集まってきてスポーツ等が行われていますので、紀南地域の社会教育と連携した強化部活動の指定というのに既に入っているという考えで私はいます。

次の「就職から進学に至るまで・・・」というところは、先ほど西委員からもお話がありましたし、昨年も私からお話させていただきましたように、教育改革の中で学習指導要領の改訂に伴い、「アクティブ・ラーニング」が非常に重視されています。「アクティブ・ラーニング」がどのような学習を指すかという捉え方は様々ありますが、能動的学習をとおしてコミュニケーション能力の育成にも注力するということから言えば、人に理解してもらえるように話せるようになるプレゼン型の授業もあるので、アクティブ・ラーニングを含めて、「コミュニケーション能力の育成にも注力する」ということを付け加えてはどうかと考えています。

以上が、新たに入れさせていただきたいと考えている点です。

簡単にまとめると、1には「命に重点を置いた指導を行う学校」ということで、防災、交通安全、薬物乱用等も含められるかと考えています。2には、「自らの進路を探求し、実現を目指す総合学科」というようにしてはどうかと考えています。3には、「コミュニケーション能力の育成にも注力したアクティブ・ラーニング」ということを入れてはどうかと考えていますが、ご意見等いかがでしょうか。

#### **(廣畑委員)**

素晴らしい学校のイメージ図を描いていただいたと納得させていただきました。私の意見としては、その中でもコミュニケーション能力をつける教育を特色として書いていただいたらというものです。中身については十分考えて書いていただいていると思います。

#### **(久保委員)**

私も廣畑委員と同じ意見です。

ただ、冒頭で事務局から、新しい学校を中間地点に建てる等の場所に関わる協議は先送りとなりましたが、このことをどうするかということをもっと具体的にもう少し煮詰めていかなければと思います。個人的には、この協議会のこれまでの流れの中では、新しい学校は中間地点につくってほしいというのが総意ではないかと思っています。それを次回やその先まで引っ張ってしまうと、具体的な議論が進んでいかないと感じています。私は県も、紀南地域の地形を既にご存じだと思いますので、その辺の進め方について、この協議会の総意として新しい学校をつくってほしいというのが第一の希望だということで県教育委員会においても検討していただかないと、この話はなかなか進みにくいのではないかと考えているのですが、どうでしょうか。

### **(大森会長)**

先ほども宮路課長から話があったように、今日の時点では先ほどのとおりだと思います。それ以上でも以下でないとは思っています。久保委員が言われるように、次というのを考えると、今日決めるべきだという話になるかもしれませんが。

### **(久保委員)**

今日決めるということではなく、個人的には、新しい学校は中間地点につくってほしいということがこの協議会の中の総意だと思いますので、それを持ち帰っていただいて、どの地域というのはすぐには決まらないと思いますが、予算的な部分等は県が決定権を持っていますので、その中で見解を出してほしいということです。それを受けてこの協議会の中で対応を考えるということをそろそろしていかないと、話が全然進まないのではないかとやっているわけです。

### **(事務局：宮路課長)**

おっしゃられる意味はわかりますが、先ほども申しましたように、県教育委員会としては現有地の活用という原則の考えがあります。これまでも各地域でそのような考えのもとで進めてきましたが、この地域においてどうするかということについては、ご意見は賜っていただければいけないとは思っています。

今、学校像の中身について検討いただいているところですが、通常、高等学校を新しく建てるのかつくる場合に、どんな建物を建てるかというのは、中身によって決まってくるものです。建物があって中身をどうしようかという議論では、建物はなかなか建たないのが現実です。教育内容によって必要な建物を決めるのが順番です。久保委員のおっしゃることもわかりますが、大事なのはまず教育内容があって、それに合わせて何が必要かという筋道です。例えば現有地を使う場合でも、何か足りないものが出てきたら、それをどうするかという議論が次に起こってくるのがこれまでの進め方です。ご意見は賜っていきますが、まず、どういう教育内容の学校とするかが先になります。実際にはこれにどのような科目を置いてどのような活動をしていくかという具体的なことを最終的に詰めていきますので、その時間もかなりかかります。協議会においては大枠を固めていただきながら、具体的なことについては学校や関係者で詰めていくということになります。

田尾委員が言われたように、子どもが減るときに新しい学校をつくるのであれば、時間がかかるから、早く考えておかないといけないことも十分承知していますが、まず教育内容、学校像がないとなかなか難しいと言えます。

新たな学校は現在の両校の中間地点につくってはどうかということについては、ご意見としてはわかりますが、冒頭で申しました原則論もありますので、そういった中で考えていく必要があります。本日は、そういうご意見も持ち帰って今後の協議の仕方について検討させていただきます。

### **(榎山委員)**

同じことの繰り返しになってしまいますので、宮路課長の話聞く前に言いたかったのですが、昨年度から学校像のたたき台について協議してきている中、先ほど会長からより具体化していくと言われ、委員としては、今回も自分たちのレベルで細かく思いつくことを出させてもらっています。2つ増えましたが、会長がそれらのことは

すべてたたき台の中に網羅されているという説明がありましたが、本当にそうだと思います。このたたき台は、昨年度から何度もたたいてきていて、この中に私たちが求める学校の姿がほとんど入っていると思います。ですので、今の事務局の回答に返答するとすれば、次回から具体的にどんな科目を置くかという協議が必要になると思います。そのようなことになるのであれば、県教育委員会のほうから方向を提示してもらわなければ、私たちから授業時間はこうで、カリキュラムはこうでというのは難しいと思います。ぜひ、具体的にどのようなカリキュラムが必要か、どのような部活動が必要か、そのためにはどのような施設が必要かということ、次回からは具体的に議論できるようにしてほしいと思います。久保委員が先ほど言われたように、私も新たな場所に設置するということを前提に議論していかないと、本当に具現化されていないという思いがすごくあります。また、先ほど田尾委員が言われたように、時期的に考えてもその時期に来ているのではないかと考えています。

#### **(大森会長)**

こういう学校像となったときに、1年生でこういう授業配置があって、3年間でこういう授業をやっていくというカリキュラムマップみたいなものは例として出すことは可能ですか。当然高校の3年間の学習内容について学習指導要領で決まっている授業時間数等もありますが、プラスアルファでこういう授業が付け加えることが可能かどうか、今回のたたき台のベースに置ける授業科目を週時程の中で置けるかどうか。単位制というのも合意できていますので、その単位制の中でどういう授業が置けるかという科目名例を出してもらうことは可能ですか。

#### **(事務局：宮路課長)**

普通科については、一定、想定科目を置くという時間割みたいなものを提示することはできると思います。ただ、学科については、会長は今、総合学科がよいのではないかとおっしゃいましたが、学科が違えば全く違うものになっていくので、そういうところはある程度ここでの意見としていただければと思います。総合学科であればこんな感じかということも置けますが、林業科となれば林業という専門科目が必要となってきますので。

#### **(大森会長)**

33ページの学科名について、いただいているご意見の中では総合学科というのが出ております。林業科というのも出ていますが、私の考えでは飯南高校の総合学科をイメージしてお話しました。飯南高校の総合学科の場合は、農業等の授業も総合学科で行われていますので、私は開講可能だということでお話させていただきましたが、「自らの進路を探究し、実現を目指す学科」というのを「自らの進路を探究し実現を目指す総合学科」と意見をまとめてもよろしいでしょうか。ご異議のある方はお願いいたします。

#### **(徳田委員)**

私は委員として初めて参加しましたので、昨年度の学科選択の経緯もわかりませんので申し訳ありません。学科というのはすごく大事だと感じています。普通科は多分要るだろうと考えます。そして、「自らの進路を探究し、自己実現を目指す学科」を会長は「総合学科」が適切とおっしゃったのですが、紀南地域の人口も考えると、紀南地

域だけで高校を維持していくのは、将来的に非常に心配な面もありますので、できれば、他地域からも生徒が来てくれるように、特色ある学科やコースがあるということアピールできる学校をつくっていくのがいいかと思います。具体的には思いつかないのですが、もし総合学科となると、その中のいろいろな選択があって、スポーツを選択したり、地域を回ったりするとか選択のバリエーションを広げていくとかといった具体的な話を進めていくほうがいいかと思います。スポーツもしたい、勉強もしたい、就職もしたい、いろいろな専門学校に行きたいという子どもたちが凝縮されている紀南地域で、人数的にも様々な選択肢をつくっていくのは難しいかとは思いますが、特色があり、子どもたちに魅力がある、他地域から見てもすごいと思えるような学科やコースをみんなで知恵を出し合って決めていったらいいのではないかと思います。

#### **(大森会長)**

私も同じ考えです。総合学科だといろいろな系列がつくれて、しかもコミュニティ・スクールですので、地域住民の方も教育現場に入ることができますので、そういう意味で総合学科だといろいろなものが網羅できるという意味でいいかと考えて提案しました。

#### **(谷合委員)**

普通科については、宮路課長がおっしゃったように、確かにイメージしやすいのですが、総合学科と銘打って何でもできるという論法はすごく乱暴だと思います。

この意見集約の中にも「相可高校のような」とあります。相可高校は確かに専門学科で全国区になっている食物調理科もありますし、農業も土木も公務員関係で非常に成果を残しています。そこは専門学科だからこそ、特化してできることもあると思います。

総合学科というのは特化しきれないのです。なおかつ、この地域で維持できる学級数というのは、先ほどの資料に小学校の子どもたちの人数が書かれていましたが、一番少なくなってきた5学級ないし6学級ぐらいです。今の木本高校が1学年5学級です。いろいろな事情を抱えているからといって、県教育委員会がこの地域にだけ人を2倍も3倍も配置してくれるわけがないので、免許等のことは置いておいて、大体今の木本高校の教員数でもってかなり専門的な教育を本当にやっていけるのか、また一方では、普通科の中で、本人の希望に応じて大学進学もかなえていけるのか疑問です。

ここで理想論として話している分には結構ですが、それを総合学科と名前を付ければ何でもできるみたいな感じで進められると、本当にどうなのかと思います。

私は前任が尾鷲高校でした。尾鷲高校は普通科と商業の系列である情報ビジネス科、尾鷲工業の流れをくんだシステム工学科ですが、はっきり色が違いました。特にシステム工学科、工業については、色がはっきりしていました。結構しんどい生徒もいましたが、就職の部分では先輩の活躍もあって、一定程度保障されていたことはありますが、専門学科だからこそできるところもあるということは、実際に経験してみないとわかりづらいかもしれません。総合学科の中に専門学科的な部分も100%期待するのは厳しいのではないかと思います。

#### **(大森会長)**

谷合委員はどういう学科だとよいと思われていますか。先ほどのご意見を聞かせて

いただいていると、情報ビジネスとシステム工学科みたいな形の3学科体制というイメージですか。

#### **(谷合委員)**

結局は人です。相可高校の食物調理科があれだけ有名になったのも、一人のキーパーソンがいて、そこからすべて起こってきていることです。そのことを考えていくと、専門学科のほうが流れをはっきりとつくりやすいだろうと思いますし、人数のことだけで言えば、専門学科のほうが教員の配置の人数も普通科よりも多いです。

ですが、そうなってくると、またグルグル回りますが、結局、普通科がイメージしやすいと思います。しかし、総合学科なり専門学科に、一体この地域の子どもたちのあるべき姿として何を期待するかという部分の話になってきます。今の話はそこら辺をまとめないまま、とりあえず総合学科としておきましょうというように私には聞こえてしまいましたので、それはどうかと意見を述べさせていただきました。

#### **(大森会長)**

私は、33ページの「地域の特性を生かした学科」、「地域を担う人材の育成」、「地域資源の活用」というところを踏まえると、谷合委員の言われる専門学科というより総合学科ではないかと考えました。専門的な学科というのを皆様が意見集約の中で求められるというより、総合的というか、もう少し薄く広くという学科をこの地域の方は求められていると考えたので、総合学科との提案をしました。

#### **(谷合委員)**

例えば、一つの学年で10学級規模ぐらいが見込めれば、その中の普通科は3学級と、あと7学級は総合学科にすると、当然教員も7学級に対しての配当になるのでかなりの数になります。そうすると、いろいろな選択科目が置けますし、その中で地域の方にも協力いただいてというように選択肢がどんどん広がっていくと思います。しかし、当たり前ですが、2~3学級ということは、当然教員の数はそれだけ絞られていきますし、教員の持ち時間も限界があるので選択の幅も無限にはできません。

地元の方にも協力いただいてという話はよく出ますが、学校内と学校外の人たちをつなぐコーディネートの仕事は、電話一本をかけるにしても結構労力がかかります。授業が目一杯に入っている中では実際にはできません。管理職はできるかという、管理職は校長と教頭が1人ずつですから、できることには限界があります。

できないということを言いたいのではなく、今の発想の中でいえば、物理的、人的な限界は絶対ありますから、そのあたりを飛ばして、あれもこれもというのは、私は非常に現実的な人間なので、どうなのかと非常に不安を抱きます。

私は、本当に地元の子どもたちには、この地元に残って、しっかりと育って行ってほしいですし、一度外へ出て行ったとしても、戻ってきてもらって、当然地元の仕事があるかということもポイントにはなりますが、そういう思いは強く持っています。しかし、今のようなお話では、普通科のほうは比較的イメージしやすいですが、総合学科や専門学科は駄目にする議論のような気がしてならないです。本当にまとまっていくのか非常に疑問です。

#### **(大森会長)**

事務局に伺いますが、今のお話を聞いて考えられる学科を次回までに出してもらおう

ことはできますか。いろいろな学科が考えられると思います。学習指導要領等のもとで考えられる学科として、33ページの「生徒の進路希望の実現」と、「地域の特性を生かした学科」、「地域を担う人材の育成」、「地域資源の活用」を含めたこの地域で開けそうな学科はどういうものが考えられるか。私は総合学科が、先ほど谷合委員が言われるように5～6学級の中でできるのかという現実的な実現の可能性の部分で問題は残っていないかということだと思いますので、その辺を含めて実現可能な学科を出してもらったほうがよいかと考えます。私が拙速に言ったかもしれませんが。

**(事務局：宮路課長)**

学科というのは、先ほど商業とか工業と言いましたが、まず基本的な学科を全部紹介することは当然できます。今のニュアンス的なところでいけば、全国的にはキャリア教育科等の学科もありますが、全部を網羅してぴったり当てはまる一つの学科は今ないと思います。ただ、参考になりそうなものを紹介させていただくことはできると思います。

**(大森会長)**

では、次回ということによろしいでしょうか。

**(寺本委員)**

谷合委員が言われるように、確かに非常に範囲が広がってきますので、それをこの総合学科の中でやっていけるかという不安はあります。

それと、何か特化したもの、魅力あるものをつくった場合に、例えばその人気が高まった場合に、今度心配するのは、逆に地元の子がそこへ行けなくなってくることです。その場合、どこの学校へ行くのか、そういうことも考えなければいけないと思います。

**(西委員)**

会長から最初のご挨拶にもありましたが、協議会の協議の内容につきましては、委員一人ひとりの責任が問われることだと思います。

私の意見はゼロからみたいな話になりますが、地域の子どもたちの将来のために我々大人が知恵を絞って、汗をかいて、どういったものを残していけるのかと考えたときに、どうしても2校存続にこだわらないといけないと考えています。

それと、もう一つ、どうしても新しい学校にする、あるいは、2校を1校にしてどのように残すかというところだけを見て議論していいのかどうかという思いもあります。ですので、あえてここ（意見集約）へ書かせていただいたこととして、去年の11月に地域創生関連法案2法が施行になった後、今、世の中はどのような動きをしているのかということをもう一度考える必要があるのではないかと思います。本当に必死で取り組んでいます。

7月23日には、紀宝町の図書館の事業で、ローカル電子図書館と正確な名称を思い出せませんが日経何某という2つのソフトを国の補助で入れて、利用の仕方についての講演会のようなものをします。既に申込がありました。特に宣伝はしていませんが、国のほうへはそういった情報がいつています。この地域では全然そんな視点でもないですが、読売新聞が今日来ていたので、また宣伝してくれたら人が増えるかと思っています。

この地域で生活していくためにはどうしたらいいのか。この地域に人が増えるにはどうしたらいいのかと考えている中で、2番に書かせていただいた具体的な方向がやはり重要ではないかと思えます。本気で紀南高校で一つにしたときには、懸念どおり人がいなくなるのではないかとかいった話とか、木本高校一つにしたときはどうなるのか。両校の中間位置にしたときにはどうなるのか。本音を出したうえで協議しないと、私たちは、さっきも学科がどうこうと言われていたときに、私たちはふだんそういうことをやってない立場ですから、そこの議論に入ってこいと言われても、おそらく谷合委員とは同程度のレベルでの話し合いにはなりません。無理があります。

それを協議会で委員の意見を聞いたということで先に進まれては、私たちにとって辛いものがあります。委員として責任を果たしようがないという点においてどうしようもありません。その点は考慮して進めていただきたいと思います。

ここ（意見集約）へ書かせていただいたことは、今後もう少し議論してほしいと思って書きました。

#### **（田尾委員）**

前回からの宿題ということで、コンセプトやイメージをずっと見せてもらって、すごくいいなと思いましたが、言い替えれば当たり前の話、常識的なことが載っているように思います。

その中でも統合して新しい学校をつくるということについては、当初から難関大学へ進学するコースの実現のために統合しなければ、木本高校が5学級切ってしまうと、それが実現できないからという意味合いが強かったと思います。その意味では普通科のほうはいいと思います。一方で、紀南高校は今まで地元に残って働きたいという子がたくさんいて、そこで小中学校のときに学び切れていなかった子が、社会へ出たときに苦労しないようにということで、本当に基礎・基本の教育を一生懸命やってきて、仕事に就いたときについていけない、やめていくといったことを少しでも抑えることができたかという感じがしています。今言われた総合学科のことについては、やはり一言で言えば、キャリア教育の充実だけで終わってしまうのかもわかりませんが、働き出して離職しない粘り強い子を育てていくという、文言で言ったら難しいかも知れませんが、それが一番大事なことだと感じます。地元で子どもたちを預かっていく、商工会には仲間もたくさんいますので、そういった子を育ててくれるのは助かると思います。

#### **（大森会長）**

昨年度だったと思いますが、私も自分の意見として、進学を重視するのはいいのですが、そのことによって戻ってこない、Uターンできないということが起きると、逆に進学者が増えれば増えるほど過疎化が進むという現象はどこにでもあります。三重県の場合は、私の前任校の三重中京大学は、まさにその結果、廃校になってしまったので、そうならないように進学したとしてもUターンができるように、産業界の方にぜひとも採用していただかないといけないでしょうし、新しい産業の誘致も市町の行政の方にはお願いしていかないといけないと思います。

これが単にここで終わりではなくて、このことによって更に過疎化が進んでしまうことが一番いけないことですので、田尾委員が言われるように、その辺は次回からも

考えていきたいと思えます。

**(山本委員)**

宿題でコンセプトについての意見をとあったので、小学校、中学校の教職員で考えて話をした結果、ここの学校像について意見集約の表に載っている形でまとめさせていただきます。コンセプトは、先ほど皆様がおっしゃるように、申し分のないコンセプトになっているというのがほとんどの方の意見でした。

しかし、平成31年～32年度になると、木本高校5学級、紀南高校2学級が維持できなくなる状況が目に見えていますので、その場合にどうするかという話をしたのが、ここに載せている意見です。安全・安心なところに新しい学校をとという意見がありましたので、その辺の意見も踏まえてほしいと思えます。

**(櫻山委員)**

先ほどの学科の部分ですが、新しく入られた委員もおりますので、昨年度のことをお伝えしますが、どのような学科を設置するかという議論がされ、今みたいに特化するべきか、総合学科かというよりも、問題は1校にしてしまうと学校を選べないわけですので、就職から進学にという幅広い進路希望に対応した学科を設置するのがよいのではないかということでした。いろいろな学習者のニーズに合わせた科目設定という学びの引き出しを用意してほしいというのが昨年度の議論だったと思えます。ですので、県教育委員会が次回までに考えてくる学科について、システム工学科とか何々学科とか3つか4つに限られると、今まで議論してきたことと違うと思えます。

会長がずっと言われているように、引き出しが多い学科は普通科なのか総合学科なのかと昨年度議論したと思えます。私はどちらでもいいので、とにかくたくさん用意できる学科ならありがたいと意見を述べました。ですから、普通科の中にいろいろなコースが設置され、林業学があつたり紀南学があつたり漁業学があつたり、いろいろなことができるのなら、それがいいと思えますし、総合学科の中に難関大学や国公立大学を目指す進学コースを設置できるのであれば、総合学科でもいいというのが昨年度からの議論だったと思えます。その中での先ほどどのような学科が考えられるのかということについて県教育委員会に要望されたので、県教育委員会にはそこを踏まえたうえでの次回の提案を期待しています。

**(西委員)**

協議の内容と違いますが、例えば、22ページの協議の方向性の(1)に下に○が4つあって、以下の観点から協議していくという今日のご提案ですが、これを提案するにあたって、前回までの積み重ねでこういったことがあると思えます。それをここに付け加えていただければと思えます。私は全部覚えていないためにあっちこちいたりしますので、この○の2つ目については、これまでの各高校の発表からはこういったことがあげられるといったような資料としてもらえればと思えます。資料が膨大になるかもわかりませんが、汗をかいていただいたら、この審議がもっと有効になって、夜遅くなってもあまり愚痴も出なくなるのではないかと思えますので、よろしくお願ひします。

**(大森会長)**

今日は1回目だったので、いろいろと最初の出だしが多かったので、なかなか本来

の事項を話し合うことができなかつたのですが、何かほかにご意見、ご質問はございますか。

**(莊司副会長)**

私も今年から参加していますので理解不足なところがありますが、コンセプトのところに「紀南地域の社会体育と連携した強化部活動の指定」について、これに指定されなかつた部活はどうなりますか。

**(大森会長)**

紀南地域の社会体育での「熊野フェスタ2000」みたいなことを私はイメージしていたのですが、それ以外というのは、どういうものが社会体育の中であるのでしょうか。これは倉本委員にお尋ねしますが、社会体育として今、熊野ではどういうものがありますか。

**(倉本委員)**

こちらにはすべて総合型スポーツクラブと書かれていますが、会員になればいろいろなスポーツにも横断的に参加できるという地域総合型スポーツクラブです。熊野市には体育協会がありますが、質問の意味をもう一度お願いします。

**(大森会長)**

部活動の指定が外れた部活動はなくなるということでしょうか。

**(莊司副会長)**

部活動がなくなるのではなく、指定がなくなると評価がしにくいのではないかと思います。部活動によって格差が生じてしまうのではないかと感じて質問しました。

**(大森会長)**

木本高校には強化指定の部活動はありますか。

**(谷合委員)**

昨年度と今年度で県の強化指定部活動は、県下でたくさんでできますが、近隣の学校では尾鷲高校の男子の水泳部が指定を受けていると思います。木本高校、紀南高校はそういう形の指定は受けていません。

**(事務局：宮路課長)**

一番上の「紀南地域の社会体育と連携した強化部活動の指定」ということで、昨年度入れた文言です。例えば、昔はこの地域でも全国大会を目指せる運動部が高校にありました。イメージとしては、小学校や中学校でしっかり育っていても高校の部活動があまり強くないということから他地域へ出て行くことを防ぐために、そのような部活動をつくらないといけないだろうという意見からこれが入っています。これに指定されなければ、部活動ができないということではないので、しっかりと上を目指せるような部活動もあつたほうがいいだろうという意見をここへ表したということです。高校の部活動ですから、同じようにやっていけると思います。

**(莊司副会長)**

私自身、夢を追って県外に出て行ったので、そういうところが少し気になりました。指定することで逆に流出してしまうのではないかと感じたので質問しました。

**(事務局：宮路課長)**

県の強化指定というのもあり、「指定」という言葉が誤解を招きますので、そういう

部活動をつくっていくというイメージで共通理解いただけたらと思います。そういう部活動も考えていけないといけないというイメージで理解いただくほうがいいのではないかと思います。強化指定というのは言い過ぎかと思しますので、場合によっては表現を変えさせていただきます。

**(大森会長)**

「紀南地域の社会体育と連携した部活動」というぐらいでいいですか。(莊司副会長が同意する。)

**(大森会長)**

そのように修正してもらって、社会体育と連携した部活動とさせていただきたいと思ひます。ほかにございますか。

では、また改めてこれを所属団体等に持ち帰っていただいて、もう一度確認をお願いしたいと思ひます。長時間にわたりましたが、いろいろなご意見をありがとうございました。事務局に進行を返します。

**(事務局：宮路課長)**

今日は冒頭からお詫びで申し訳なかつたです。予定時刻も過ぎていますので簡単に終わらせていただきます。

今日いただいた意見も踏まえて、次回の協議につながるような資料も提供していきたいと思ひますし、今日、特に言っていただきました学科については、非常に大事なところと思ひます。学科を決めれば、潰すことはできても変えることはなかなか難しいところがあります。そういうことも含めて総合学科とは一体何かというところから資料提示も工夫したいと思ひていますので、次回もぜひよろしくお願ひします。今日は長時間ありがとうございました。

最後に事務局から事務連絡をさせていただきます。

## 6 連絡事項

**(事務局)**

事務的な連絡を3点させていただきます。

1点目、旅費に関する書類を机の上に置かせていただいた委員で、まだご提出いただいていない方は、お帰りの際にご提出ください。なお、県立学校、小中学校所属の委員には、開催案内でお知らせした方法により旅費の請求をお願いします。

2点目、駐車券の無料処理がまだの方は、お帰りの際にお申し付けください。

3点目、次回第2回の協議会の開催日について、今から申し上げる3つの日のいずれかで開催させていただきたいと思ひています。9月4日(金)、9月10日(木)、9月15日(火)です。これから調整をさせていただきたいと思ひています。いずれの場合も、18時30分の開会を予定しています。会場は、この熊野市文化交流センター内のどこかを押さえたいと思ひていますので、よろしくお願ひします。

これをもちまして、閉会いたします。遅くまでありがとうございました。お気をつけてお帰りください。